

夏目漱石「門」における作品構成の問題点

吉川裕子

一、

宗助の参禅はいつ頃行われたのだろうか。「大晦日」(十五)から、元旦、二日、三日、七日、八日、そして宗助の友人であった安井が坂井家を訪問する九日、十日の朝七時過ぎというように、日付がはっきりしていたのが、十八章に至ると不明なため、この疑問が生じるのだが、まず、これについて考えていく。

宗助は一封の紹介状を懐にして山門を入った。彼はこれを同僚の知人の某から得た。某同僚は役所の往復に、電車の中で洋服の隠袋から菜根譚を出して讀む男であった。かう云ふ方面に興味のない宗助は、固より菜根譚の何物なるかを知らなかった。ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗った時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな

妙な本だと答へた。宗助は重ねて何んな事が書いてあるかと尋ねた。其時同僚は、一口に説明の出来る格好な言葉をもつてゐなかつたと見えて、まあ禪學の書物だらうといふ様な妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いた此返事を能く覚えてゐた。

紹介状を貰ふ四五日前、彼は此同僚の傍へ行つて、君は禪學を遣るのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顔を見て頗る驚ろいた様子であつたが、いや遣らない、たゞ慰み半分にあんな書物を讀む丈だと、すぐ逃げて仕舞つた。宗助は多少失望に弛んだ下唇を垂れて自分の席に歸つた。

其日歸りがけに、彼等は又同じ電車に乗り合はした。先刻宗助の様子を、氣の毒に觀察した同僚は、彼の質問の奥に雑談以上のある意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切に其方面の話をして聞かした。然し自分は未だ嘗て参禅といふ事をした経験がないと自白した。もし詳しい話が聞きたければ、幸

ひ自分の知り合によく鎌倉へ行く男があるから紹介してやらうと云つた。宗助は車の中で其人の名前と番地を手帳に書き留めた。さうして次の日同僚の手紙を持ってわざ／＼回り道をして訪問に出掛けた。宗助の懐にした書状は其折席上で認めて貰つたものであつた。

役所は病氣になつて十日許休む事にした。御米の手前も矢張り病氣だと取り繕つた。

「少し腦が悪いから、一週間程役所を休んで遊んで来るよ」と云つた。御米は此頃の夫の様子の何處かに異狀があるらしく思はれるので、内心では始終心配してゐた矢先だから、平生煮え切らない宗助の果斷を喜んだ。けれども其突然なものにも全く驚ろいた。〈略〉

御米は善良な夫に調戲つたのを、多少濟まない様に感じた。宗助は其翌日すぐ貰つて置いた紹介状を懐にして、新橋から汽車に乗つたのである。〈十八〉
冒頭から引用したが、これらを分かりやすく箇条書きにしてみると、次のようになる。

①ある日の出来事、通勤電車の往復に禅学の書物を読んで同僚と車内で一緒に、宗助はその本についてたずねる。

②紹介状をもらう四五日前、宗助はその同僚に、禅学について聞こうとするが、期待した答えは返つてこない。

③其の日の帰り、二人は又同じ電車で顔を合わせる。同僚は、禅の話の彼に聞かせ、参禅によく行く、自分の知人を紹介しよう

と言つて、住所を教える。

④次の日、同僚の手紙を持ってその人を訪問する。その時、禅寺へ持って行く紹介状を書いてもらう。

⑤その翌日、紹介状を懐に入れて鎌倉へ出発する。

②と③は、同じ日に起こつた事である。この翌日に、④で示しているように紹介状をもらつている。ここから判断すると、「紹介状を貰ふ四五日前」という表現は、成立しない事が分かる。又、②③の項目から、宗助は安井の出現から最低三日後に、参禅に出かけている。同時に言えるのは、安井が坂井家を訪問した日の三日後に、宗助が鎌倉へ出かけているという証拠はどこにもない。確かなのは、安井の出現から二日間は、鎌倉に行つていないという事である。

矛盾が生ずるとはいえ、「紹介状を貰ふ四五日前」という表現には何か意味があるのだろうか。十七章の続き、十日当日なら、こうは言わないだろう。十日の翌日に②③が起きているとしても、わざわざこんなまわりくどい言い方をする必要あるだろうか。例えば「その翌日」とか「次の日」という風にもっと簡単な表現の仕方はいくらでもあるのだ。同じ作品の他の場面ではどうなっているのか。調べて見た内のいくつかを例としてあげておく。まず、前の事柄の次の日の事件に関しては、

〈ア〉翌日眼が覺めて役所の生活が始まると(四)

〈イ〉明る日も亦同じ様に雨が降つた(一六)

〈ウ〉次の日宗助が役所の歸りがけに(九)

〈エ〉次の日三人は表へ出て遠く濃い(一四)

〈オ〉翌日になっても宗助の心に落付(十七)

〈カ〉明る日に役所へ出ると(二十二)

この中で、〈ウ〉は坂井が宗助宅を訪れた翌日、古道具屋の前で坂井と出会う場面だし、〈カ〉は、宗助が久々に出社する、鎌倉から帰って来た次の日であるというように、日が継続している場合は、必ずそれをはっきりさせている。したがって、②と③の出来事は一月十日の翌日には起きていないと考えた方がよい。

では、どうなるのか。今度ももう一つの気になる表現に焦点をあてる。先に箇条書きにしておいた①にあたる部分である。本文では「ある日」一つの腰掛に膝を並べて乗った時」とある。この「ある日」は、(A)坂井から安井の事を耳にする前か、(B)耳にした後なのか、断定は出来ないが、いずれかに該当する。それぞれの場合を取り上げて考えてみよう。

(A)とした時、宗助が現実問題としては安井の事を考えていない頃になる。すると、参禅は比較的すぐ行われたようにも思えるのだが、先に触れたように、「紹介状を貰ふ四五日前」という表現が邪魔している。一方、(B)だとしても、一月十日の翌日なら、「次の日」とかいうように、最も適切に表現する方法があるので、一月十一日の事ではない。では、「紹介状を貰ふ四五日前」、又は、「ある日」の出来事は、一月十日の二、三日後、もう少し範囲を広げ三、四日、四、五日後を指すのだろうか。また、視点を変えて、「ある日」の出来事は、鎌倉へ出発する三、四日、四、五日前の事なのだろうか。

〈キ〉豫期の通り二三日して返事が(四)

〈ク〉二三日して、たしか七日の夕方(十六)

〈ケ〉越えて三日目の夕方に、小六は(十)

〈コ〉四日目の垢を流すため横町の(二十三)

〈サ〉四五日目になる、ざら／＼した腮(四)

〈シ〉三四日前彼は御米と差向ひで、(五)

〈ス〉彼は三四日前漸く京都へ着いた(十四)

〈セ〉小六は四五日前とう／＼兄の所へ(八)

〈ソ〉え、漸く四五日前歸りました(二十二)

作品から適当な表現を、いくつか抜き出してみた。これを見ても明らかのように、二、三日、四、五日前後の事柄に関しても、作者は明確に描写しており、当てはまらないと言えよう。

「ある日」という言い方は、自分でも正確には覚えていない、随分前の事や、予想出来ない将来の事に対して、ある日の私は……だった、きっと私にもある日……する時がくるだろうという風に、かなり漠然としたものに対して使われるのではないだろうか。そして現在の事柄から、見当がつかないほどの時間の経過を感じさせる。ここではさらに、「紹介状を貰ふ四五日前」という言葉がある。「ある日」の出来事からすぐであれば、表現の仕方は他にあるのに、敢えてそうしていないのは、違うというわけだ。一月九日、「ある日」の出来事、同僚から知人の紹介を受けた日、この三つはそれぞれ、連続したものではなく、いくらか間隔があいている。

結局、言える事は、「ある日」の解釈はどちらをとったとしても、一月九日から十八章の参禅に到るまで、多少の日数が経過している。

この点から、宗助は安井が現れてすぐに参禅していないという事実が、浮かび上がる。そうするとまた、疑問が生じてくる。これについては、次に述べていこうと思う。

二、

まず、正月七日の晩、八日、九日の描写がされている十六章・十七章から判断すると、果して彼に、安井の存在を知りながら、しばらくの間、崖下の家で耐え続ける程の根気があったらどうかという疑問が出てくる。しかし、九日以後も何日かは、宗助は仕事に出かけ帰宅するという日常生活を送っていたのである。参禅に行くまでの間、宗助が別の所に住んでいたとは考えられない。又、会社を時々休んでいたわけでもない。どちらにせよ、そんな事をすれば、御米はひどく怪しむだろう。その上、頭を休める為に禅寺へ行くので会社を十日間休むと告げたとしたら、「此頃の夫の様子は何處かに異状があるらしく思はれる」(一七八)といった程度では済まされなかつたはずであるからだ。それとも、彼は、安井と再会する事に対する覚悟が、ある程度出来ていたのだろうか。

正月七日の夜、彼は坂井家に招かれる。そして、弟の友人として安井が一緒に来るという、とても信じられない事実を、悪気のない坂井から聞かされる。おかげで宗助は、かろうじて安井と対面する事だけは避けられたが、これを聞いて青ざめた顔で帰り、寝込んでしまう。帰宅後の宗助の態度や心理が描かれている内で、いくつか

の部分に次に列挙してみた。

彼は満洲にゐる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知らうとは、今が今迄豫期してゐなかつた。もう少しの事で、其安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣り合せか、向ひ合せに坐る運命にならうとは、今夜晩食を済す迄、夢にも思ひ掛けなかつた。△略▽自分の様な弱い男を放り出すには、もつと穩當な手段で澤山でありさうなものだと信じてゐたのである。(十七)

過去の痛恨を新にすべく、普通の人が滅多に出逢はない此偶然に出逢ふために、千百人のうちから撰り出されなければならぬ程の人物であつたかと思ふと、宗助は苦しかつた。又腹立ちかつた。(同)

宗助は一層のこと、萬事を御米に打ち明けて共に苦しみを分つて貰はうかと思つた。(同)

宗助はとう／＼言はうとした事を言ひ切る勇氣を失つて、嘘を吐いて誤魔化した。(同)

以上が、七日の晩の宗助である。翌日は、どうであつたか。

役所では手が着かなかつた。筆を持つて頬杖を突いた儘何か考へた。時々は不必要な墨を妄りに磨り卸ろした。烟草は無暗に呑んだ。△略▽飯を済まして烟草を一本吸ふ段になつて、突然、

「御米、寄席へでも行つて見やうか」と珍らしく細君を誘つた。△略▽

彼は高座の方を正視して、熱心に淨瑠璃を聞かうと力めた。けれどいくら力めても面白くならなかつた。△略▽

中入の時、宗助は御米に、

「何うだ、もう歸らうか」と云ひ掛けた。△略▽宗助は折角連れて來た御米に對して、却つて氣の毒な心が起つた。とう／＼仕舞迄辛抱して坐つてゐた。(十七)

安井が帰国するとは、全く予想していなかつた。思いがけない不吉な知らせは、それだけで十分、宗助の心を震え上がらせる。だが何よりも、現在の自分と関わりの深い坂井からそれを教えられたのと、突然聞かされたとはいへ、予想外の事に何事もなかつたように平然と構えていられなく、正直な心があらわれてしまつた事、彼にとつて衝撃的だつたはずである。深く覚悟を決める勇氣のない宗助は、御米に助けを求めれば心の負担は随分軽くなるのに、悩みを打ち明けられない。宗助の御米に對する態度については、小宮豊隆氏が、「決して對等ではなく、優者が劣者を、強者が弱者をいたはる態度」として、その理由を、宗助が「御米の、自分の生活に於ける價値を認めない」為であろうとらえたのをはじめとして、多くの指摘がある。

次の日も宗助は落ち着かない。寄席に御米を誘い、出かけるのも、役所で煙草を吸つていた行為とさしたる違いはない。ただ、悪い方へ思考を働かせる自分が辛くて、氣を紛らせているだけだ。御米に自分の弱さが露顯するのを恐れる癖に、自分の利己心に彼女迄つき合わせる。家にいると余計な事が氣になるので、それを回避しよう

とする宗助にとつて外出先は寄席でなくとも他の場所でも構わなかつた。食事に行くよりも、おそらく長い間時間が潰せるという点を計算に入れたのだらう。ここにも、迫ってくる現実に對する抵抗と焦りが感じられる。

今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に來ると云ふ事を想像すると、何うしても、わざ／＼其人と接近するために、こんな速力で、家へ歸つて行くのが不合理に思はれた。同時に安井はその後何んなに變化したらうと思ふと、餘所から一目彼の様子が眺めたくもあつた。(十七)

彼は坂井の家の傍に立つて、向に知れずに、他を窺ふ様な便利な場所はあるまいかと考へた。不幸にして、身を隠すべきところを思ひ付き得なかつた。若し日が落ちてから來るとすれば、此方が認められない便宜があると同時に、暗い中を通る人の顔の分らない不都合があつた。(同)

安井に出会う事への恐れと同時に、今の安井に對する関心があつた彼は、非常に子供じみた策を練らうとする。いかに馬鹿げた事を考へているか自覚のない宗助には、ただ逃げまどう人間の愚かさが目につくばかりだ。

彼の神經は一步でも安井の來る方向へ近づくに堪えなかつた。安井を餘所ながら見たいといふ好奇心は、始めから左程強くなかつた丈に、乗換の間際になつて、全く抑えつけられてしまつた。(同)

しかし、それは現実が目前まで押し寄せてくる迄の宗助の心情に

すぎない。乗りかえの駅まで来ると、宗助の本心が顔を出す。それは畏縮してしまつて、結局は帰宅時間をずらして、道中で安井に会うのを避けるやり方を選択する。

牛肉店に入ったが、辛抱しきれず、彼はまた、目的もなく町の中心を歩く。

もし此状態が長く續いたら何うしたら可からうと、ひそかに自分の未來を案じ煩つた。今日迄の経過から推して、凡ての創口を癒合するものは時日であるといふ格言を、彼は自家の経験から割り出して、深く胸に刻み付けてゐた。それが一昨日の晩にすつかり崩れたのである。(十七)

自分の力よりも、時間が解決するのをあてにしてこれ迄過ごしてきたなんて、相当凶太さを感じさせるが、安井は宗助の哲学も破壊してしまふ。

彼は黒い夜の中を歩るきながら、ただ何うかして此心から逃れ出たいと思つた。其心は如何にも弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過ぎて希知に見えた。彼は胸を抑えつける一種の壓迫の下に、如何にせば、今の自分を救ふ事が出来るかといふ實際の方法のみを考へて、其壓迫の原因になつた自分の罪や過失は全く此結果から切り放して仕舞つた。其時の彼は他の事を考へる餘裕を失つて、悉く自己本位になつてゐた。今迄は忍耐で世を渡つて來た。是からは積極的に人生觀を作り易へなければならなかつた。さうして其人生觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の實質が太くなるもの

でなくては駄目であつた。

彼は行く／＼口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれども其響は繰り返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ烟が、手を開けると何時の間にか無くなつてゐる様に宗教とは果敢ない文字であつた。

宗教と關聯して宗助は坐禪といふ記憶を呼び起した。昔し京都にゐた時分彼の級友に相國寺へ行つて坐禪をするものがあつた。當時彼は其迂濶を笑つてゐた。「今の世に……」と思つてゐた。其級友の動作が別に自分と違つた所もない様なのを見て、彼は益馬鹿々々しい氣を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑に値する以上のある動機から、貴重な時間を惜まらずに、相國寺へ行つたのではなからうかと考へ出して、自分の輕薄を深く耻ぢた。もし昔から世俗で云ふ通り安心とか立命とかいふ境地に、坐禪の力で達する事が出来るならば、十日や二十日役所を休んでも構はないから遣つて見たいと思つた。けれども彼は斯道にかけては全くの門外漢であつた。従つて、此より以上明瞭な考も浮ばなかつた(十七)

逃げるだけの日頃の自分を自覚し、反省するが、一方で、手段を選ばず、ただ救われるのを懇願していた事も、否定できない。一つの方法として坐禪を見つけるが、学生時代の級友の存在から思ひついたという程度のものである。この時点では、今一つ眞摯な態度が見られない。どんなに立派な決意があつても、挑戦しなければ無効

である。未経験だというのなら工夫をすればよい。でも彼は、義務を感じても、欲求があっても、実行に移せない「すぐれて非実践的な人物」であり、自分から働きかける事はなく、時間の解決を待つ。甚だ都合がよすぎるのではなからうか。

今夜に限って彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上つた事も、無理に酒を呑んだ事も、丸で話したくなかつた。何も知らない御米は又平常の通り無邪氣に夫から夫へと聞きたがつた。

「何別に是といふ理由もなかつたのだけれども、つい彼所いらで牛が食ひたくなつた丈の事さ」

「さうして御腹を消化す爲に、わざ／＼此所迄歩るいて入らしたつたの」

「まあ左様だ」

御米は可笑しさうに笑つた。宗助は寧ろ苦しかつた。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎ひに來なかつたかい」と聞いた。

「いゝえ、何故」

「一昨日の晩行つたとき、御馳走するとか云つてゐたからさ」
「また？」

御米は少し呆れた顔をした。宗助は夫なり話を切り上げて寐た。頭の中をざわざわ何か通つた。(十七)

自分の事はあまり話しながらない癖に、御米からは何かを聞き出そうとする。秘密をもっているの、明らかに、明らかに質問出来ず、偵察するような方法を宗助はとる。宗助には新たに、心配事が増える。

御米が何か気づいていないかという事だ。坂井が、自分を本当に弟達に紹介しようとしていたのか、気がかりであつたが、坂井の家において、安井との奇遇の可能性が高かつた事については、その時は大した問題ではなかつた。塚越和夫氏は、

要するに、宗助は安井に会わずにすみ、自分のことが安井に伝わらないでくれればそれでよいのである。そういう、いわば低次元の苦悩なのである。

と指摘しているが、宗助の悩みはそんな単純に割り切れる種類のものではないと思う。もし、坂井が家に來ていたとすれば、坂井は宗助を誘ひに來たわけを詳しく話し、安井の事も何か言っているかもしれない。その上、宗助がこの間來た事についても、この話をした頃、顔色を変えて歸られたが、もうお元氣になられましたかという風に御米に話してしまつたとすれば、もっと致命的である。中山和子氏が、

自分の留守中に、崖の上の坂井家を訪れた安井が、どんな偶然でお米とバツタリ遭遇するかも知れぬ、というような夫らしい思慮をめぐらすことなどはない。

と述べているように、肝心の事には無頓着で違う方向へ神經を尖らせている。心の不安を少しでも拭い取りたくて、御米が何も答えてくれなければ安心だと願いつつも、何も聞かないのは気がかりだから、どんな事でもいいから、御米が出来るだけ詳しく話してくれるのを期待するといった相反する気持ちの葛藤を、彼は心の内部に生じさせる。それにしても、妻に探りを入れるようになれば、おしま

いである。それだけ彼が、現実には怯えていると言えよう。こんな風に、彼のあさましい心は、卑劣な形になって現われた。

安井の事を聞いた目を含めて、三日間の宗助の態度や心理を取り上げて考えてみた。安井という名前を聞いただけで、彼は大変動揺した。安井の出現は、「漸くにして得られていた彼の精神的平衡を一挙に突きくずすほどの大事件」^(註六)だった。今と将来の不安に怯え、正々堂々とせず、何もかもから逃避するばかりだった。妻には素直になれず、自分の弱さもさらけ出せず、平常心を失っていた為、卑劣な手も使った。ここには臆病者の愚かさばかりが、目立って感じられる。自分の精神の脆さを十分自覚した事になったとはいえ、安井との奇遇に対する覚悟は、微塵もない事がこれから判断出来る。家でひそかに耐え続ける事さえ、彼には不可能だった。ひたすら危険を恐れ、安全な方へ逃げるばかりで、まともに逆境と向き合う事が出来ない弱い人間だという事がよく分かる。

ところが、宗助は安井が来た次の日もその翌日も崖下の家にいる。これは前章で明らかにしたので敢えて繰り返さない。その上、安井が坂井家を訪問して三、四日後参禅している証拠がないので、なかなか出発せず長い間、この家にいたとも考えられる。そうすると不審な点に気づくはずだ。あの宗助にしては、まるで何事もなかったような落ち着きぶりである。あれ程、分別を失っていた人間が、そんな冷静に振るまえるはずがないかという事である。確かに、「晚餐」(二十二)に招待されて、坂井の弟と安井は、坂井家を訪問したのだから、其夜の内か一泊して次の日には、そこを出るだ

ろう。だが、蒙古からわざわざやって来たのだから、しばらく日本に滞在するはず位、宗助にも予測がつくはずである。それとも、一つ考えられるのは、「無行動性」^(註七)が災いして、なかなか踏ん切りがつかなかったという事である。しかし、これはどうか分らない。安井の存在を自覚するのを避ける事や、安井から隠れる事には例外だったとも言えるからである。

彼は尋常でなくなっていて、あらゆる不可解な行動を取っていた。作者が描けないほど参禅する迄の宗助の取り乱し方は、ひどかったのだろうか。そこで、二番目の疑問点を次に考える必要が出てきた。それは、参禅するに到った具体的な経緯や出かける前日を別にして、一月十日起床後から参禅する日までの宗助達の言動が一切描写されていないという点である。

一月九日から何日後に、宗助の参禅が行われたかは不明だが、多少の日数が経っているという事は、前述した通りである。それなのに、その間の事はほとんど触れられていない。作品構成上の欠点として、宗助参禅の部分が谷崎潤一郎氏をはじめとして、ずっと論じられているのも致し方な^(註八)かろう。一方、参禅の設定を不自然でないとする論も^(註九)みられる。何も、参禅行を否定的なものとしてとらえているのではない。この設定はあってよいと思うが、ただ前触れもなく、急に十八章で参禅行の所から始まっている点が感心出来ないものである。参禅する迄の期間に、宗助夫婦が一体何を考え、何をしていたか、宗助が相変わらず、ぼんやりして苦悩し続けている様子、それを観察して、理由が分からないので心配している御米の姿は、

極力描写されるべきであらう。

もし、一月十日の三日後に鎌倉へ行ったとすれば、十一日に同僚から参禅によく行く知人の住所を聞き、その次の日に、その人の家を訪問して紹介状をもらい、翌日が参禅日という事になるので、宗助夫婦の言動は描写しなくても全然構わない。しかし、参禅はすぐに実現していない以上、省いてしまっではいけないだろう。むしろ、丁寧に描写すべきだと思ふ。それなのに、肝心の所が抜けてしまっているのは、一体どういうわけなのだろうか。

それだけではない。作品では宗助夫婦と安井が出会う事がない。安井の登場については、桶谷秀昭氏が、

安井という人物はあらわれるはずでいて、結局あらわれない。わたしにはこれも作者の御都合主義とは考えられない。もともと安井は作品の現場に再びあらわれる必要はすこしもなかったのである。

と指摘しているが、果してどうか。何も、二人が帰国して東京にやっ来て来たからといって、宗助夫婦と出会う必然性はないが、出逢いさうになるとか、姿を見たり、誰かから聞いて存在を知るといふ設定は、あってもよきそんなものである。しかし、宗助にしろ、坂井から話を聞かされて知るのみであり、御米と安井に關しても、先に述べたような、その他の接触が行われたようには描かれていない。崖上の坂井家に安井達が訪問するという状況から推測しても、これは少し不自然ではなろうか。

ところで、この疑問を考えるにあたって、安井と坂井の弟が帰国

した目的を確認しておきたい。

坂井の弟は、坂井が、「其奴が去年の暮突然出て來ましてね」(十六)と話しているので、すでに年が明けるまでに日本に來ており、「蒙古刀」(十六)を土産にして、坂井家を訪問している。

それに今度東京へ出て來た用事と云ふのが餘つ程妙です。何とか云ふ蒙古王のために、金を二萬圓許借りたい。もし貸してやらないと自分の信用に關わるつて奔走してゐるんですからね。

(十六)

お金の都合をつけるのが、弟の帰国目的であつた。坂井は又、安井について、「弟の友達で向から一所に來たもの」「私はまだ逢つた事もない男ですが、弟が頻に私に紹介したが」(十六)と形容している。単なる顔なじみ程度なら、自分の親はもちろんのこと、兄にわざわざ紹介しないと思うので、二人は、親友かそれ以上のつき合いをしていると云える。さらに、同じ蒙古から出て來たというのは、一緒に仕事をしている仲間を意味するのではないか。弟は、銀行の勤めを物足りなく感じ、「大いに發展して見たい」とかとなへて」(十七) 満州へ行き、失敗しても、欲があつて、懲りる事なく、日本に決して帰つてこなかつた男である。安井も、友人である宗助と妻の御米に裏切られて、「半途で學校を退」(十七)き、何も、国を出る必要はなかつたのに、覚悟を決めて、日本を脱出し、満州へ渡つた男である。故郷を捨てたも同然の二人が、余程の事がない限り、帰国しようとは思われない、今のうちに、交通が発達していない時代に、そう簡単には帰れない。だから、去年の暮れに、弟だけ出て

きて、後から安井が来たとするのも、坂井の弟が暮れからそのまま日本にとどまらず、一度蒙古に戻っているというの、考えられない。すると、同じ事業に参加している者同士とすれば、安井も金の工面に奔走するのが目的という事になり、二人揃って、去年の暮れに帰国してきた事に対して、一番納得がいくと思う。

少し前の引用に戻る。彼らは、望郷の念から帰国したのではなく、金策の為であつたが、東京を拠点にしている事が分かる。しかし、暮れに出て来て、坂井の弟は坂井家に挨拶に行くが、兄の所では世話になっていない。「丁度明後日の晩呼んで飯を食はせる事になつてゐるから」「實はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」(十六)という坂井の言葉が証明している。彼らが、宿屋か下宿住まいをしているのかは分からない。また、東京に用事があつて来た者が、他県に滞在するとは思えない。自分の仕事の能率が悪くなるような事は、誰もしないだろう。むろん、安井は「國は越前だが、長く横濱に居た」(十四)男で、「京都大學」(二十一)に入学したのだから、坂井の弟よりは日本各地に知人がいるとも考えられるので、その範圍を対象にして、活動した事もあつたと思われるが、一人ではなく坂井の弟と一緒にあれば、東京中のどこかに、二人は一時的に住む所を見つけていると考えられよう。

年の瀬から東京に来て、弟のみが兄の家へ土産を持参して訪問している。宗助が一月七日の晩、坂井家を訪れた時、坂井は二人の事に関して、

丁度明後日の晩呼んで飯を食はせる事になつてゐるから。△略▽

安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、弟が頻りに紹介したがるから、實はそれで二人を呼ぶ事にしたんです。

(十一)

と言及している点から、これは九日というのが判然としている。それから、年末から九日の間に、弟が時々、坂井家に入入りする事はこの文からは可能になる。實際は違つたとしても、二通りの解釈が出来る。一方、いくら弟の方が一人でやって来ている場合があつても、安井は九日になる迄に、坂井家に顔を出している事はありえない。

年末に現れた二人が、坂井家に泊まらず、別の場所にいたという事は、九日以後も、坂井家に滞在していないと考えるのが、妥当かもしれないが、どうも納得し難いものがある。宗助が参禅後、久々に坂井家を訪問した時の一場面を、次に引用する。

「御舎弟は其後何うなさいました」と宗助は何氣ない風を示した。

「え、漸く四五日前歸りました。ありや全く蒙古向ですね。

御前の様な夷狄は東京にや調和しないから早く歸れつたら、私もさう思ふつて歸つて行きました。△略▽

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論一所です。あゝなると落ち付いちゃ居られないと見えますね。何でも元は京都大學にゐたこともあるんだとか云ふ話ですが。何うして、あゝ變化したものですかね」

宗助は腋の下から汗が出た。安井が何う變つて、どう落ち付かないのか、全く聞く気にはならなかつた。ただ自分が主人に安井と同じ大學にゐた事を、まだ洩らさなかつたのを天佑の様に難有く思つた。(二十一)

弟の消息を尋ねられて、坂井は、最小限に話すだけである。自分の弟に関する話をした一月七日の晩、宗助が顔色を悪くして去つていったのが氣になつて、あまり触れないの原因は不明だが、二人がどんな話をしたのか、また、二人に対しては、先に示したように、坂井の発言があるが、どういふ点からそのように感じたのか、具體的な話は何もしない。宗助が分かつたのは、彼らが四五日前に歸つた事実だけである。

幸運にも、自分も「京都大學」に在籍していた事があつたとは、坂井に打ち明けていなかったが、

其晩主人が何かの機會について自分の名を二人に洩らさないとは限らなかつた。宗助は後暗い人の、變名を用ひて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「貴方はもしや私の名を安井の前で口にしませんか」と聞いて見たくて堪らなかつた。

けれども、夫丈は何うしても聞けなかつた。(二十二)

とあるように、それを確認する事で不安を解消したいのだが、体裁を氣にする姿勢の方が強くて、思いとどまる。そして、「知らうと思ふ事は悉く知る事が出来なかつた」(二十二)の宗助の心の内であり、実に後味の悪いものに終わっている。たとえ宗助が聞かなくても、少しは話しそうな坂井が、それ以上言わないのも不思議で

ある。

ここで注意しなければならぬのは、坂井の話す内容である。これは、一月九日のみ二人に会つて感じた事とは言えない。それ以後も、家に呼ぶなどしており、その時の事を宗助に聞かせている可能性もあるだろう。

なぜかという、坂井は、宗助と一緒に登場する事で、作品中の登場人物としての役割をしている。宗助の存在しない所の坂井は描写されない、極端な例だが、九日の訪問が実際に起きているかどうか、本当は分からないのである。

さらに、先の引用で坂井の会話中の「漸く」という言葉に注目してみたい。この表現からも、東京は出たらしいが、仮住まいの宿屋からなのか、坂井家なのか、一体どこから歸つたかは不明である。しかし、この表現と坂井の会話全体を見て考えても、弟がやつと日本を去つた事への安堵感がうかがえるのだが蒙古に歸る迄、一月九日の一回しか坂井家に来ていない。音信が途絶えていたら、「離れてさへぬれば、まあ可いんですが」(十六)という風に、もう少し呑気でいられそうなのである。これは私なりの解釈であるが、二人は、一月十日以後も、坂井家に入出入りして、坂井は常に彼らの存在を意識しなければならぬ状況に追ひこまれて、それが頭痛の種になつていたのではないか。「漸く」という言葉は、彼の正直な心のあらわれと言えるのではないか。

幸い、安井と弟が、九日以後坂井家に入出入りしているか否かにについては断定されず、二人の東京での滞在場所も記されておらず、暖

味な点ばかりなので、自由な解釈を加える事が許されると言えよう。これらの状況から判断しても、やはり、十七章から十八章のあたりで、一月十日以後、参禅までの宗助夫婦の言動をもう少し描写し、安井と宗助夫婦が出会いそうになるとか、姿を見かけるとか、誰かから話を聞いてお互いの存在や居場所を知る等、三人を直接的、又は間接的に関わらせる設定を作る事は、少しも不自然にはならない。むしろ、作品世界に安井を何らかの形で登場させるべきだったと思う。したがって、「安井は作品の現場に再びあらわれる必要はすしもなくった」という桶谷氏の指摘には賛成出来ない。

結局、宗助は安井の事を、話として聞くだけであり、他の二人についても、お互いの存在を知ったのかどうか何も語られず、やがて安井は日本を去るというのは不自然であろう。

二、

まず、安井と坂井の弟の日本での滞在期間について考える。この点については、二十一章の終わり、二十二章冒頭に、

宗助は老師の此挨拶に對して、丁寧な禮を述べて、又十日前に潜った山門を出た。疊を壓する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後に聳えた。(二十一)

家の敷居を跨いだ宗助は、己れにさへ惘然な姿を描いた。彼は過去十日間毎朝頭を冷水で濡らしたなり、未だ曾て櫛の齒を通した事がなかつた。(二十二)

とあり、二十二章は、十日間の参禅を終えて帰宅した当日だと分かる。この後に、「明る日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた」とあるのが、帰宅して二日目を目指す。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落した。夜に入つて彼は、

「一寸坂井さん迄行って来る」と云ひ捨て、門を出た。(十二)

「御舎弟は其後何うなさいました」と宗助は何氣ない風を示した。

「え、漸く四五日前歸りました。ありや全く蒙古向ですな。御前の様な夷狄は東京にや調和しないから早く歸れつたら、私もさう思ふつて歸つて行きました。」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論一所です。あゝなると落ち付いや居られないと見えますね。△略▽」(同)

これはその次の日、つまり帰宅して三日目の出来事である。後の方の引用は、坂井家に着いた宗助が、坂井と会話をしている場面であり、同じ日のその後の出来事である。この中で坂井が、弟と共に安井も、四、五日前に帰った事を話している。

彼らの滞在期間や宗助の参禅時期を考えるにあたって、図を作成した。(図1参照)

参禅から帰つて来て三日後から四、五日前というと、参禅の八日目か九日目である。言いかえると、宗助が帰宅する二日か三日前迄、

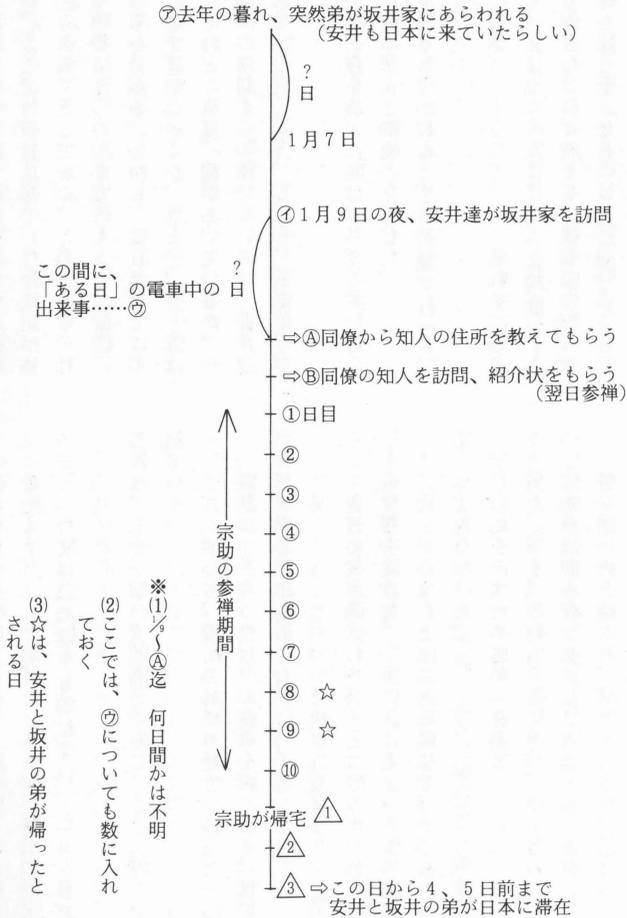


図 I

蒙古からの訪問者は、日本に滞在していたという事になる。それは、どれ程いたのであろうか。

去年の暮れから二人が日本に来てゐる事は、前に確認した。暮れといへば二十日以降を指すが、ここでは何日に来ていたか決定づけるものがないので、「大晦日」(十五)としておく。この日から一月八日までの日数と、九日から順番に☆印の所まで数えると、最低二十一、二日は、滞在している事が分かる。しかし、これだけでは不十分である。以前取り上げたので詳細は省くが、㊦と㊧、㊨と㊩は日が連続していないし、それぞれどの程度、間があいているか、全く見当がつかない。宗助の参禅の時期すら明確でないので、安井達が日本を去つた日も断定出来ないと云えよう。しかし、重要な手がかりがある。

辭して表へ出て、又月のない空を眺めた時は、其深く黒い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。

彼は坂井の家に、たゞ苟くも免かれんとする料簡で行つた。

△略▽

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて、頭に觸れずに過ぎたらしかった。けれども、是に似た不安は是から先何度でも、色々な程度に於て、繰り返さなければ濟まない様な虫の知らせが何處かにあつた。それを繰り返させるのは天の事であつた。それを逃げて回るのは宗助の事であつた。(二十一)

二十二章は、鎌倉から帰宅して三日目の、宗助が坂井家を訪問し、帰っていく所で終わっている。

月が變つてから寒さが大分緩んだ。官吏の増俸問題につれて必然起るべく、多數の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末迄に片付いた。其間ぼつり／＼と首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ歸つて御米に、

「今度は己の番かも知れない」と云ふ事があつた。(二十三)

これは、二十三章の冒頭部分である。この引用の少し後を、続けて見ていく。

月が改つて、役所の動搖も是で一段落だと沙汰せられた時、宗助は生き残つた自分の運命を顧りみて、當然の様に思つた。

又偶然の様に思つた。△略▽

又二三日して宗助の月給が五圓昇つた。△略▽

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まつた飯の香を嗅いだ。△略▽

梅がちらほらと眼に入る様になつた。早いのは既に色を失なつて散りかけた。△略▽ある日曜の午宗助は久し振りに、四日目の垢を流すため横町の洗湯に行つたら、五十許の頭を刺つた男と、三十代の商人らしい男が、漸く春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換はしてゐた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴聲を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答へてゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「え、まだ充分に舌が回りません」(二十三)

引用部分を分かりやすくまとめたのを、次にあげる。

- ① 宗助は、参禅から帰って三日目に坂井を訪問（四、五日前に二人が帰った事を聞く）
- ② 月が変わり、官吏の増俸問題によって生じる局員課員の淘汰が行われる。
- ③ 宗助は、自分もいずれ、首になるかもしれないと言って不安がる。
- ④ 月末には、①の件はほぼ片付く。
宗助は、首をきられずに済む。
- ⑤ 月が改まる。①は終わる。
- ⑥ 二、三日後、給料が五円増える。
- ⑦ 翌日、その祝をする。
- ⑧ 梅があちらこちらで咲き、「既に色を失なつて散りかけた」ものもある。
- ⑨ ある日曜の午後、銭湯で、二人の男が、鶯の鳴き声をめぐって問答しているのを耳にする。
- ⑩ ②⑤にあるように、①から二ヶ月経過しているのが分かる。ここでは一切、月の表示はしていないが、「梅」と「鶯」という言葉が、季節だけでなく、何月に相当するかを示している。「鶯」は春告げ鳥といわれるし、「梅」の方も、良い取合わせのたとえとして、「梅に鶯」といわれるように、ほぼ同時期のものである。作者の書簡の中にも、鶯の鳴きはじめの頃かかれたものがある。

段々春めいてきて少しは暖かになった。昨日湯に入ったら今

朝始めて鶯をき、ましたよ。まだ下手ですなと云つてゐた。佐伯

これにも見られるように、また一般的に言われる通り、「梅」と「鶯」は、三月の花鳥である。したがって、②～④は二月、⑤～⑨は三月の出来事というわけだ。すると、①は一月中に起こっているので、宗助の参禅も、安井達が日本を去ったのも、必ず一月中に済まされているという事になる。

①～⑨の箇条書きを見ながら、図Ⅰに再び戻る。まず、①の坂井家の出来事の日を限定すると、宗助の参禅の時期も、安井達が退去した日も、見当がつく。これはあくまでも推定であるが、①を一月三十一日としてしまふ。図で言うところの△を三十一日にして計算する。そうすると、一月十九日～二十八日の期間が、宗助の参禅時期であり、安井達の去った日は二十六か二十七日で、去年の暮れから一カ月前後、彼らは滞在していたという事になる。

一月十九日～二十八日参禅説が、成立する可能性は高い。なぜなら、これよりも遅い事は決してありえないからだ。図の△が必ず一月中でなければならぬ以上、彼が鎌倉へ行く最終の期間になると言えよう。

十九日が参禅初日だとすると、宗助は、蒙古からの客が坂井家に来るとされていた九日から十日間、崖下の家で暮らしている。したがって、④は④の八日後になる。これは別に構わないのだが、⑦がその八日間の範囲で起きた事とするのは、問題があるのでなかろうか。こんなに短期間なら、もっと適切な言いまわしがあるのに、敢えて、「ある日」（十八）という表現方法をとるとは考えにくい

らである。本稿では、第一章で、「ある日」について簡単に説明したが、あの観点から考えると、やはり㉔と㉕の間には、㉖は含まれていないと考えるべきだろう。

「門」の本文を見ると、十七章と十八章の間は、相当な時間の経過があるように思われたが、事実はそれ程でもない。しかし、十八章の初めの方にみられる「ある日」の出来事や、実際は「紹介状を貰ふ」一日前なのに、「四五日前」と書かれた表現は、そのような錯覚を起こしてしまう。しかし、内容から判断すると、一日前となっているのに何か意味があるのだろうか。これを次に考える。

四、

「紹介状を貰ふ四五日前」と書かれている日の出来事は、実はもう一日前の事だと以前明らかにした。本文では、なぜ、内容とくい違う表現がされているのだろうか。又、表現に矛盾があっても、これの内容の示す通り、一日前の出来事になっているのは、何か意図があるのではないだろうか。そこで、この章では、一日前に設定した意図として何通りか考えられる事を述べてみたい。

まず、これは今迄との関連で導き出した見方であるが、「紹介状を貰ふ四五日前」にあたる、同僚から知人の住所を教えてもらう日をA、紹介状をもらう日をBとする。もし、AがBの四五日前とすると、一月十日とAの間隔は、一日前にしたよりも縮まる。一章で述べた事を反復すると、Aはその表現方法から、一月十日と連続し

ない、何日か過ぎた日の事とみなす。十日の翌日ではもちろんないし、二三日〜四五日後でもない。これは、作品中の他の部分に、翌日や前日、二三日〜四五日前後の事については、明確に記されている部分が無か所が見られる事から判断した。

仮に、十日の六日後の十六日がAだとすると、その四五日後の二十日か二十一日がBとなり、翌日の二十一日か二十二日が参禅日となる。二十一日からの場合は三十日、二十二日からの場合は三十一日に、十日間の参禅期間は終了する。

しかし、宗助の参禅で一月が終わってしまっただけなら、その日から何日か過ぎて、やっと二月に変わるからだ。その間、宗助が鎌倉から帰って来て三日目に、坂井家を訪問する日も含まなければならぬ。この場合、坂井家を訪問する日は、帰宅して三日目なので、二月三日か三日になってしまう。それでは、後の部分と照らし合わせると、矛盾を生じる。視点を算して計算してみても、参禅から帰って三日目を三十一日とすると、十九日から参禅がはじまり、十八日がBで、Aはその四五日前の十四日か十三日になってしまう。すると、十日から三四日しか経っていない。これも不自然で成立しないというように、AをBの四五日前にすると、都合が悪くなる。

作者は、この点に気づき、AをBの一日前にしたのではないかとすると、一月十日とAの間も適度な間隔があくし、一月中に参禅も坂井家の訪問も済ませる事が可能になる。

次の解釈に進む。まず、参禅中の宗助の態度や心理が描かれている部分を、いくつつか引用する。

彼は悟といふ美名に欺かれて、彼の平生に似合はぬ冒險を試みやうと企てたのである。さうして、もし此冒險に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救ふ事が出来はしまいかと、果敢ない望を抱いたのである。(一十八)

最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考へるのも寐て考へるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅に疊んであつた薄汚ない蒲團を敷いて、其中に潛り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちて仕舞つた。(同)

どんな解答にしろ一つ拵らへて置かなければならないと思ひながらも、仕舞には根氣が盡きて、早く宜道が夕食の報知に本堂を通り抜けて来て呉れ、ば好いと、夫ばかり氣に掛かつた。

(同)

忽然安井の事を考へ出した。安井がもし坂井の家へ頻繁に出入でもする様になつて、當分滿洲へ歸らないとすれば、今のうちあの借家を引き上げて、何處かへ轉宅するのが上分別だらう。こんな所に愚圖々々してゐるより、早く東京へ歸つて其方の所置を付けた方がまだ實際的かも知れない。(二十一)

參禪中の宗助の心構えや心理の描写を見ても、この中のどこにも、參禪に対する真剣さを感じられない。

宗助が參禪で悟りを得る事が出来なかつた原因については、苦しみからの逃避の爲など、多くの指摘があるが、やはり、安井に会うのを避ける為や、安井の存在を四六時中、意識しなければならぬ

忍耐の生活に限界を感じ、自分を守るために、一つの手段として參禪を選んだからではなからうか。

坂井と云ふよりも、坂井の所謂冒險者として宗助の耳に響いた其弟と、其弟の友達として彼の胸を騒がした安井の消息が氣にかつた。△略△彼は山にゐる間さへ、御米が此事件に就いて何事も、耳にして呉れなければ可いがと氣遣はない日はなかつた位である。△略△

宗助は其夜床の中へ入つて、明日こそ思ひ切つて、坂井へ行つて安井の消息をそれとなく聞き糺して、もし彼がまだ東京にゐて、猶しばしば坂井と往復がある様なら、遠くの方へ引越して仕舞はうと考へた。△略△彼は今夜此所で安井に落ち合ふ様な萬一はまづ起らないだらうと度胸を据ゑた。それでもわざと勝手口へ回つて、御客來ですかと聞くことは忘れなかつた。

(二十一)

鎌倉から歸つた宗助の様子を見ても、ほとんど変化は見られない。參禪中の胸中をそのまま引きずつてゐる。手段を選ばず、「ただ、何うかして此心から逃れ出たい」(十七)、今の状態から脱出したいという衝動に駆られた上での行為である事が分かる。

參禪は表向きは失敗という事になるが、彼にとつて、そんな事はほとんど問題外だつたと言えるだらう。だが、この軽率さが、十日間の參禪に、どれほど大きく影響したのかは言うまでもないだらう。

宗助の行為に、衝動的又は軽率さを感じさせる為には、同僚から

知人を紹介された次の日に、その知人宅を訪問して紹介状をもらう設定にする方が、効果があると思う。もし、同僚から知人を紹介されて、四五日経つまで知人宅を訪問しないという設定では、しばらく宗助に、今後の事を思案する時間を与えてしまう事になる。しかし、ここで宗助に、十分考えてもらっては具合が悪い。成行まかせの無計画の上で実行されなければならない。この点からもう一言えるのは、当初から計算に入れていて変更する気はなかった、宗助の参禅の失敗を、正当化する為に、一日前としたのではないかという事である。

その他、考えられるのは、執筆をわずらわしく感じたためではないか。四五日前だとしたら、その間の事について何も触れないのは不自然である。宗助の行動や心理は、最低描写する必要が出てくる。それを行うのは、先にも述べたが、作品の内容上、甚だ都合が悪い。しかし、それだけでなく、作者の気持ちは、それを描写するのを極力避け、すぐ紹介状をもらうという方法に変えたのではないか。だが、頭の中では構想を変更したつもりでも、文章の方は直されていなかった。作者は、これに気づかないままだったのか。それとも、訂正しようと思いついてしまったのだろうか。

森田草平氏の著書に、次のような箇所がある。

先生の原稿には書直したり抹殺したりした跡が殆どない。殆どない處か、一つもないと云つていゝ。それが隨筆や論文ばかりでない。小説でもさうである。不審に思つて、何日かその理由をお尋ねした時、先生は「いや、僕は一旦書いた文字は口から

出たと同様、取返しは附かないものだ」と諦めてゐる。だから、少々氣に入らぬことがあつても、後は又それと合せてその様に書いて行く」と云はれた。妙な理窟だとは思つたが、先生は重ねて「君達の様に何度も推敲したり書直したりする位なら、僕はもう一篇新に別な作をする」とも附け加へられた。さう云はれると、私どもには返す言葉がない。△略▽兎に角餘程頭がしつかりしてゐなければ、先生の眞似は出来るものではない。

一日前の事なのに四五日前という表現がされた点は、「少々氣に入らぬことがあつても後は又それと合せてその様に書いて行く」という範囲内に含まれるのだろうか。しかし、これは、氣に入らないという一言で片付けられない。数の間違いである。このまま放置すれば、漱石は、足し算や引き算が出来ないのかと馬鹿にされかねない。それが氣になるのだが、漱石にとつては全然お構いなしだったのである。文章書きに失敗はつきものだ。誰かに迷惑かけるのは悪いが、そうでなければ直す必要などない位の大胆さから、自分の執筆上の誤り、同様に弟子達のそれにも、寛容になれたのだろうか。彼にとつて、何よりも、一度形にしたものを書き直すのは、失言の後で下手な言い訳をするのと同じほど、許せなかったといえる。言い訳は一切通用しない、自分の行為に対しても、人以上に責任を感じ、厳しさから作者の芯の強さが感じられるが、一方で、拘泥がなすぎて好い加減である事も否定出来ないように思う。

作者はなぜ、こんな間違いをしてしまったのか。これは単なる誤りだけではなさそうである。何か、深い原因があるところであつた方が

興味深い。先に私は、作者が、四五日前の事を描写するのさえ、わずらわしくなったのではないかと指摘したが、この点から考えると心当たりがないわけではない。

まず、「門」という題名に触れておく必要がある。これは当時、朝日新聞の文芸欄の仕事をしていた森田草平が、漱石から、名前を付けて予告を出してくれと依頼され、小宮豊隆に相談し、ニイチエの『ツアラツストラ』の中から見つけてつけられた。さらに、森田氏によると、漱石は翌日の新聞で、始めて自分の作品の題名を知ったのだという。

作者が自分の門下生に題名を依頼し、彼らがそれをつけた事に対して、諸家の指摘がある。高木文雄氏は、

然し予定している内容の一部を漱石が漏さずに題を決めて呉れと言付ける筈もなく、森田がそれを聞かずに、言付けられた事に感激して小宮の下宿へ走った筈もないだろう。『それから』のそれからで、主人公が参禅する事になる予定で、準備を進めている所だ位の言葉の授受はあったと見るべきである。それで題は『門』と決った。それに漱石は合せなければならなかつた。

と述べている。^{注八〇}最初の五行に注目してみる。作者は、作品の構想の大まかな点を彼らに話しているという見方であるが、果してそうだろうか。これを考えるのに、もう一度、小宮氏と森田氏の著書に戻る。まず小宮氏は、

草平も豊隆も、言ひつけられたから名前をきめはしたものの、

それでよかつたのかわるかつたのか、まるで見當のつけやうがないのだから、内心あまり穏やかでなかつた。△略▽假令漱石の書く小説の内容にびたりと嵌る名前ではなかつたまでも、その内容にそぐはない、もしくはその内容の邪魔をする名前であつては困るといふ氣があつた。然しそれが邪魔になるかならないかは、小説が濟んでからでないと思つた。その上その小説は、相當長い間、一向「門」らしい氣色を見せなかつた。△略▽漱石が「門」といふ名前と小説の内容とを實に巧みに關聯させた。その手際の鮮やかさに驚嘆の眼を瞪らざるを得なかつた。^{注八〇}

森田氏も

この作が何ういふ風に發展して、何處で何う「門」の題意が生かされるかと興味を以て眺めてゐた。しかも、それが最後に及んで、恰も先生自身が豫めさういふ腹案を持つてでもゐられたやうに、何のわざとらしさもなく素張らしい成功を以て實現された。^{注八〇}

と述べている。二人とも、門という題名がどのように作品中で活用されるのが大きな関心であつた。森田氏の方がかなり余裕をもつた態度を示しているのに対し、小宮氏の方は、直接依頼を受けたわけでもないのに、大変氣をもんで、名前を自分達が決めた事に、責任を感じていた事がうかがえる。森田氏だけを取り上げると、作者は作品について何らかの事を聞かせた為かとも思われるが、もし、依頼を直接受けた森田氏が内容の一部を聞いていたならば、小宮にも

その話をしてはならずであり、小宮氏が不安になるはずはないだろう。もし、高木氏の指摘通りの事があつたとすれば、二人は漱石の依頼を引き受けた上、作品の内容など念頭において決めたのだから、十分義務は果たしたのであって、その後、作品がいかなる方向へ進むうとも、その責任は漱石にあるのだから、いくら師が頼んだ事とはいへ、それは彼ら二人には無関係の事である。また、内容の一部を聞かされていたら、ある程度、つけられそうな名前がしぼれるし、「門」は好い。これなら象徴的で何んな内容でも盛ることが出来る。」^{注23}という言葉が発せられるとは考えにくい。題名をつけるにあつたの制限が何も加えられなかつたからこそ、二人は全く見当がつかず、仕方なしに、おもしろ半分、近くにあつた本から題名を決めたのだろう。このように、作品を考慮せず、適当につけたからこそ、不安になつたり、責任を感じているのであろう。したがって、高木氏の論は当てはまらないと言えよう。佐藤泰正氏も、

この『門』という題名の予告を紙上に見た作者漱石に、ひそかに頷くものがなかつたわけはあるまい。△略▽作者はすでに作中いくつかの△門▽を用意していたはず

と指摘している。^{注22}佐藤氏は、作者が内容の一部を弟子に教えているかどうかについては触れていない為、高木氏と見解を異にしているのか否かは不明であるが、付けられた「門」という題名と作品の内容を、偶然一致したようにとらえている。その後で、作者が描いた二つの門を「禅寺の山門」と「宗助の回想にあらわれる△運命の門▽」としているが、題名の予告が発表された、まだ連載もされて

いない早い段階で、それらを取り入れる予定があつたのだろうかという疑問が生じるので、この説も成立しにくいように感じる。さらにこれについて考えていく。今度は、作者の題名へのこだわり方を見て行こうと思う。小宮氏は、

勿論漱石から言へば、名前なんぞどうだつてよかつたのかも知れないし、また必要だと思へば、どんな名前がついてゐても、結構それを活かして見せるといふ、自信があつたのだらう。^{注24}

と述べている。又、森田氏も、昔から題目にはさう繋づらはない先生でもある。『虞美人草』なぞの場合にも、縁日で偶然見附けた鉢植ゑから取つて、平氣でゐられた。^{注25}

としてゐる。これについては、作者もその予告の中で次のように言及している。^{注26}

昨夜豊隆子と森川町を散歩して草花を二鉢買った。植木屋に何と云ふ花かと聞いて見たら虞美人草だと云ふ。折柄小説の題に窮して、豫告の直に後れるのを氣の毒に思つて居つたので、好加減ながら、つい花の名を拜借して巻頭に冠らす事にした。△略▽余の小説が此花と同じ趣を具ふるかは、作り上げて見なければ余と雖も判じがたい。

社では豫告が必要だと云ふ。豫告には題が必要である。題には虞美人草が必要でないかも知れぬが、一寸重寶であつた。聊か虞美人草の由来を述べて、虞美人草の製作に取りかゝる。

これだけではない。『彼岸過迄』について、

「彼岸過迄」といふのは元日から始めて、彼岸過迄書く豫定だから單にさう名づけた迄に過ぎない實は空しい標題である。^{注八九}

という作者の解説まで見られる。酒井英行氏が、これについてすでに、「漱石はそれほど題名にこだわる作家ではない」「作品の内容を題名に無理に合わせようとは全く努めていない」と指摘している。^{注九〇}いくつか引用したが、これらを総合して判断しても、作者は、題名に對するこだわりが、ほとんどなかったと言えよう。

中身を重視して題名をつける時間を作るのが惜しかったのか、考えるのが面倒だったのか。どちらも当てはまらないとは断定出来ないが、他にもっと考えられる事があるのではないか。

宗助の参禅の部分を、森田氏は、「どうしても題を見た後の思ひつき^{注八八}」としている。確かに一理ある発言である。「門」を書くにあたって、最初から具体的に参禅の構想があったのかどうかは分からない。全く考慮に入れていなかったともいえるし、具体的にはなかったにせよ、大まかにあったかもしれない。片岡良一氏は、

少くともこの表題が決った時、漱石の「門」のプランはおおよそには輪廓づけられたものではなかったかと思う。輪廓的には正しく段取りが踏まれているのに、作品そのものの展開としてはやや内部的必然に欠けるところのあるのが、そんなことを思わせる。^{注九一}

と述べている。「少くとも」という表現が、やや気になるが、宗助の参禅行は、初めからは具体的でなかったという見方をしている。

安東璋二氏も、作者が本当に書きたかったのは、前半の宗助夫婦の生活であるという前提を元に、「宗助参禅はおそらく後でつけ加えられた構想」だとしている。^{注九二}

一方、高木氏は、先程の引用にあるように宗助の参禅行は当初から予定していたと解釈している。その他、酒井氏の、

参禅がなくても、『門』という題名は象徴的に生きていると考えられる。かりに、『門』という他人が付けた題名を明確な形で生かすために、参禅というプロットを仕組む必要性があったにしても、『それから』のそれからを構想する段階の漱石は、過去の罪を主人公に追究させることを初めから構想していたはずという指摘がある。^{注九三}これは、必ずしも題名からの束縛で参禅が設定されたわけではないという意見である。最後の二行が一体何を指すのかという点を考えると、参禅を最初から予定していたととらえている可能性も、高いように思う。

もし、森田氏の通り、「題を見た彼の思ひつき」で、作者にとつては意外な展開であったとしても、

おそらく、構想をたてるに当って基本線を明確におさえて、あとは自由にまかせるという態度で、作にのぞんだのであろう。いかに題がきめられても、どこかでそれを生かしてみせるという、自身の構成の才についての自信があったにちがいない。

という遠藤祐氏の指摘^{注九四}にあるように、どんな題名でもうまく形作る事が出来るのを自覚しているのが、本来の漱石の姿であった。確かにそうであろう。そういう自信がなく、作品の題名に對し、強い思

い入れがあり、自分で決めなければ気が済まない人間なら、いくら弟子といえども、他人まかせには出来ないはずであるからだ。どんな題名を与えられても、そこで動じる事がない。大胆だとはいえ、臨機応変にやれる手腕を持っているのが、漱石の才能であるといえる。

又小説をかき出した。三月一日から東京大阪兩方へ出る。題は門といふので、森田と小宮が好加減につけてくれたが、一向門らしくなく困つてゐる。（注八〇）

この書簡だけでは、作者の本心は読み取りにくい。なぜなら、口ではそう言つても、ただ謙遜しているだけとも考えられるからだ。しかし、これまでの漱石から判断すると、やや自信を失くしているように思う。これが、自分より目上の人や、あまり親しくない人ならともかく、漱石の門下生の寺田寅彦宛の書簡であるだけに、疑問が生じてくる。これは彼の本音ではないだろうか。気取る必要のない相手に、謙遜するとは思えないからである。新聞紙上で初めて題を知ったとしても、題名には拘泥せず、順調に進んでいた作者が、「一向門らしくなく困つてゐる」と弱気になつて打ち明けているのは、題名からの束縛ではなく、他の要因があるとみねばなるまい。それは次を見れば明らかになつてくる。

- ①小説執筆中にて多忙今度はゆるゆる書いて居候。（注八一）
 ②小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲勞する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候。（注八二）
 ③「門」御愛讀被下候よし難有存候近頃身體の具合あしく書く

のが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入つて充分療治せんかと存候四十を越すと元氣がなくなり申候。（注八三）

④小生胃病烈しく外出を見合せ世の中を頓と承知不仕候。（注八四）

⑤胃病にて長與病院に行く胃くわいような疑あり。ことによると入院の積。（注八五）

⑥漸く小説を書き終つたらば色々な雑用が出来矢張忙殺。（注八六）

⑦小生は其後不相變胃病に苦しみ居候處十日程前決意長與の胃腸病院へ参り候處胃潰離の疑に遂に入院する事に相成明十八日より轉移致候いつ出るか分りかね候。（注八七）

①だけでは具体的なものがつかめないが、②の時点で、体の不調を自覚している。これについては、小宮氏も、

漱石は是まで小説を、一氣に、ぶつとほしに書いてしまふのが常であつた。途中で邪魔が這入つて、どうかすると、一日二日と筆を執らない事はあつても、それまでの漱石は、日に二回分でも三回分でも「氣に任せて」書いて、少しも疲勞しなかつたのみならず、寧ろ書けるだけ書かなければ氣が済まない、傾向を持つてゐた。然るに「門」では、身體の具合が悪いといふので、日に一回分しか書かない方針をとつてゐるのである。

と述べている。（注八八）③では病院行を考へているし、「早く片付けて休養致し度」は、一番の本音であり、苦痛の中での、必死の心の叫びととれる。「四十を越すと元氣がなくなり」とあるように、弱音まで吐いている。（注八九）

小宮氏によると、漱石は「門」を新聞で掲載される約一週間前の六月五日に脱稿している。翌日、胃腸病院で、胃潰瘍と診断され、⑦にもあるように、六月十八日に入院する。そして、七月三十一日に退院し、八月六日に修善寺に転地し、二十四日の午後八時三十分頃、五百グラム吐血し、人事不省の危篤状態に陥る。いわゆる、修善寺の大患である。

これによって言えるのは、漱石が書く事すら渋った理由は、「當時の漱石の健康状態」という事になろう。作家の仕事といえども、病気には勝てなかった。多くの作品を新聞小説として送り出し、脚光を浴びていた漱石に、プロとしての意識がなかったはずがない。身体の不調と共に、小説を早く終わらせたい心情を綴っているのは、決して怠け心からではない。本音を告白せずにはいられない程、体の内部に故障が生じていた。安東氏が、「その健康の支配を微妙に受けていないとはいきまい」^{注44}と指摘するように、それが結果として、参禅の章で描写されるべき事が省かれていたり、思わぬミスが生じてしまったとも考えられよう。

紹介状をもらう一日前に設定している事の意図を様々な角度からとらえて考えてみた。それによって言えるのは、この内のいずれも考えられ、判断がつけ難いという事である。作品全体から見れば、うっかり見落としてしまうような部分であるが、調べている内に意外な発見もあり、作者の構成に対する心構えも表面化されたように思う。

五、

安井と坂井の弟が、東京に滞在していたのは、暮れから約一ヵ月間で、宗助の参禅も、文中の表現から、一月中に終わっている事が明らかになった。それは、参禅から帰宅した三日目に、坂井家を訪問した日（これをAとする。以下省略）で二十二章は終わり、二十三章では、最終的に二ヵ月経ち、後の方が三月とする決め手があり、Aまでは一月の出来事だと判明したからである。

したがって、Aは遅くとも、一月三十一日という事になる。仮にAを三十一日として計算していくと、帰宅して一日目が二十九日なので、一月十九日から二十八日の期間が、宗助の参禅の時期といえる。

当初は、「紹介状を貰ふ四五日前」「ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗った時」(十八)という箇所から、「四五日前」とする事に矛盾があるとはいえず、これは一月十日からすぐ起こったものではないと判断していた。又、宗助は、安井が坂井家に現れてから、長い間、参禅していかないとの見解を示していたが、参禅の初日を十九日としても、彼は安井出現の九日から十日間だけ、崖下の家で暮らしていた事になり、十七章と十八章の間は、もう少し、時間の経過があるように感じられたが、事実はそれ程でもない事が解明された。しかし、十八章の最初の方にみられる、「ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乗った時」(十八)の出来事や、実際は紹介状をもらう一日前

の事なのに、「紹介状を貰ふ四五日前」(十八)と書かれた日の描写は、十七章と十八章の間に、相当、時間の隔りを感じさせ、錯覚を起こしてしまう。十八章の書き出しもこれと同様である。^{注46}

前章では、内容的には一日前の事なのに、「四五日前」(同)となっている所を踏まえて、それを一日前の出来事にした意図を、四五日前にした場合と比較して、一日前にしないと作品構成上、矛盾が生じるため、宗助の参禅行を軽率だと感じさせるため、健康状態の悪化から多く描写するのをわずらわしく感じたためなど、色々と解釈を試みたが、いずれも考えられ、判断は出来ないという結果になった。

その代り、作者がなぜ、紹介状をもらう前日に起きた、宗助が同僚から知人の住所を覚えてもらう出来事を、「紹介状を貰ふ四五日前」としたのかを、ここで明らかにしておく。

参禅する日の一昨日にあたるのだから、参禅する二日前や、前々日など、もっと簡単な言い回しはあるのに、ここではそういう表現がされていない。もし、作者も、この日の出来事を、参禅する二日前の事と念頭においていたとすれば、「四五日前」とはしないはずである。そこで考えられるのは、作者の最初の構想は、この日の出来事を、紹介状をもらう日の四五日前に設定していたという事である。比較的早い段階に、宗助の参禅を描く事は決定していて、その頃から十八章を書く現在迄のかなり長い間、この構想が作者の頭の中に定着していた。

それがどういいうわけか、同僚から知人の住所を聞いた翌日に、知

人宅を訪問し、紹介状をもらうという設定に、突然変更された。しかし、一度決めたやり方は、どうしても念頭に置いてしまう。それはそれなりに、十分考慮した上の設定だったので、いくら変えたからといって、完全に消えてしまうわけではない。思い込みがひどすぎるが、執筆する時点においても、彼の勘違いは、そのまま、あらわれてしまったという事になる。

何と言っても、この部分は、作者のミスである。執筆後も確認しなかったのか、「一旦書いた文字は口から出たと同様、取返しは附かないものだ」と諦めて^{注46}そのまま放置していたのか、どちらにせよ、明らかにこれは、作者の構成上の不備である。彼が作品の構成上の問題を十分考えなかったからこそ、生じたといえるのである。

注

〈1〉引用は、『漱石全集』第四巻(昭50・3・10 岩波書店)の本文に拠った。ルビはすべて省略した。印刷の都合上、本字体が新字体に植字されている場合があると思う。

〈2〉『漱石の芸術』(昭40・3・30 岩波書店・192・193頁)

〈3〉「宗助の愛がすでに相互信仰の絶対性を喪失していたことの端的な証拠」(遠藤祐「門」の世界 試論)〔文学〕34巻2号・昭41・2)94頁

たしかに宗助とお米は一つの過去の事実を共有している。しかし、その過去がめいめいの現在に及ぼす苦悩・苛責はか

ならずしも同じでない。いかに親密な夫婦といえ、胸の奥底にいいがたい秘事のあることは不思議でない。水くさいとか水くさくないといった次元の問題でなく、かかる秘め事のあるのは人間の生に不可避の宿命なのである。

△桶谷秀昭「漱石における自然と夢」『三四郎』『夢十夜』『それから』『門』を中心に―（「解釈と教材の研究」15巻5号・昭45・4・）40頁▽

かなり冷めた視点からとらえているが、「宿命」という一言であまりにもあっさり片づけられてしまっているような気がしないでもない。もし、宗助だけが背負っている過去であるならば、妻にさえも話すのは、なかなか勇気が出ないと思う。一方、氏の考えるように、話せないのではなく話す必要はないという考えから、「宿命」としてとらえる事も成立するだろう。しかし、氏がこの中で、宗助夫婦が「一つの過去の事実を共有している」と説明しているように、これは、宗助一人の過去ではない。

二人は夫から以後安井の名を口にするのを避けた。考へ出す事さへも敢てしなかつた。彼等は安井を半途で退學させ、郷里へ歸らせ、病氣に罹させ、もしくは満洲へ驅り遣つた罪に對して、如何に悔恨の苦しみを重ねても、何うする事も出来ない地位に立つてゐたからである。（十七）△全集813頁▽

しかし、これは、安井が彼らの前から姿を消したから成り立つことで、安井が身近に現われるらしい現実、目前まで迫って

いる。それが避けられない以上、宗助夫婦も、安井の事で最低限は話し合う必要があるだろう。これは、二人共通の過去なのだから、話を打ち明ける宗助が、不利になる事は全くない。宗助は恐怖のあまり、かたく口を閉ざしてしまい、それが積み重なると、今度はだんだん言い出せなくなり、秘密にせざるを得なくなったのだと思うが、宗助が事実をひた隠しするのは関心出来ない。

昭和50年代以降のものでは、

この夫婦は、対等だといわなければならない。むしろ、お米がリードしている場合すらあるのだ。△略▽私は、宗助がいわなかった点にも、この理想の夫婦関係にひそむズレを読み取りたい

△塚越和夫「夫婦の構図―宗助・御米―」（「文学年誌」7・昭59・4）37頁▽

という指摘がある。これは、宗助夫婦が「對等」でないとする小宮氏と反対の見解であり、私も同感である。

最近の論では、海老井英次氏が、宗助の態度には、「△△愛▽の感傷性に溺れている生き方が確認される」としている。△△△罪▽の揺曳・△信頼▽のゆらぎ―夏目漱石『門』に於ける△信▽の世界」（「叙説」7 平5・1）49頁▽

△4△ともかく彼は△月日△という緩和剤の力▽や△凡の創口を癒合するものは時日▽というように、総て、時によって自己の犯した△罪▽から逃避しようとしていた態度の無意味さを、安井

の話聞いた後の、自己の心的動揺によって知る。

という指摘がある。〈山本勝正「漱石の『門』の世界」(関西学院大)人文論究」21巻4号 昭46・12) 51頁〉

〈5〉西垣勳「門」(「解釈と教材の研究」10巻10号 昭40・8) 107頁〉

〈6〉注(3)参照・36頁37頁

〈7〉「『門』論」(「一つの有機体」神話の隠蔽するもの」(「解釈と教材の研究」平6・1) 136頁〉

〈8〉土居健郎『漱石の心的世界』(昭57・11・30) 角川書店・81頁〉

彼は是程偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡を掛けなければ、倒す事の出来ない程強いものとは、自分ながら任じてゐなかつた(十七・81頁) という部分について、土居氏は、「自分の弱さが暴露されたことに対する無限の悔みが隠されている」としているが、本文のこの続きを見ると、

自分の様な弱い男を放り出すには、もつと穩當な手段で澤山でありさうなものだと信じてゐたのである。

となつており、「悔み」だけでなく、期待外れに対する落胆も見られるのではないかと思う。

〈9〉高木文雄『漱石の道程』(昭42・1・10) 審美社 99頁に、宗助はいまさら安井をおそれる必要はない。ただ、安井と会うことによってせつかく安定しかけた片隅の幸福に波が生じているであろうがゆえに、安井と会うことをおそれたのであろう。

そういう動きやすい心で、ほんとうにお米を愛しとおすことができるだろうか、と宗助は考えたのだ。かれがおそれたのは不安なかれ自身の心をなのだ。

という部分がある。しかし、宗助は今さらながら、安井を恐れている。安井と会う事どころか、安井が近々現われるらしい事を聞いただけで、「片隅の幸福に波が生じる」程度以上に、すでに宗助は、普通の生活をするのさえ、支障をきたしている。宗助は妻を本当に愛し続けられるのだろうか、自身の不安な心を恐れたのだと氏は指摘しているが、宗助がそんな事を考えていたとは、とても受け取りにくい。本当にそう考えていたら、宗助は御米に、安井が現れる事を話し、心配するなど励ましたりして、自分自身の安井出現による被害よりも、御米が安井に出会う可能性などを、現実問題として、真剣に考えたであろう。しかし、宗助には自分を危険から守る事しか念頭になく、妻の危険には、全く鈍感であった。したがって、この説は成立しないと思う。

〈10〉西垣勳「註」5頁参照

〈11〉谷崎潤一郎『門』を評す(「新思潮」明43・9) 〱「谷崎潤一郎全集」第20巻(昭43・6・25) 中央公論社 9頁〉は、「如何に見ても突飛であらう」

正宗白鳥「夏目漱石論」(「中央公論」昭3・6) 〱「文壇人物評論」(昭7・7・25) 中央公論社 75頁〉は、「少し巫山戯てゐる」

「何といつても飛躍的△略△内面的な筋が通らぬ——つまりリアリティーがない」△片岡良一「片岡良一著作集」第九巻（昭55・2・25）中央公論社 128頁▽

宗助参禅が場面として唐突であり、或いは思い付き的だと人々の批判の対象になる一因は、おそらく前半の「淋しい」が「睦まじい」夫婦生活の描写こそ、実はこの作品の本来の作因であったことと照応する。

△安東璋二「漱石私論」——「門」の考察をめぐって」（北海道教育大学「人文論究」25号 昭40・3）61頁▽

△12△△遠藤祐（注△3△参照）94頁▽

禅に△精神修養△を求めるのは、庶民的な禅理解として普通であって、そう考えればこの参禅行の設定は、いささかも不自然ではない。

△桶谷秀昭（注△3△参照）38頁▽

『門』の作品構成上の欠点、あるいは破綻として、裏の崖上の家主の家に安井があらわれるという話を聞いた宗助が狼狽し、ひそかに鎌倉に参禅するくだりが、しばしばあげつらわれているが、わたしはその批判に同意しない者だ。

△佐藤泰正『門』——その主題と方法」（『梅光女学院大』日本文学研究」15号 昭54・11）112頁▽

ここに何の飛躍も矛盾もありはすまい。

宗助参禅の動機を思えば、いかにも凡常な俗人の考えそのな思いつきであり、何の突然変異的な志向でもあるまい。

むしろこれを作品展開上の亀裂とみるならば、その矛盾、分裂は宗助の参禅という行為にあるのではなく、宗助を「門の下に立ち竦」むべき人間として語ろうとしたことであろう。

△酒井英行『漱石その陰翳』（平2・4・4）有精堂・178頁▽
『それから』のそれからを構想する段階の漱石は、過去の罪を主人公に追究させることを初めから構想していたはずであり、参禅は、決して「巫山戯てるる」（白鳥）わけではない。

△海老井英次（注△3△参照）51頁▽

作品発表当初より、この座禅行に関しては、作品の展開からみて「唐突に過ぎる」とか、余りの飛躍は「馬鹿気ている」などの批判が絶えなかつたのであるが、宗教的なものとの出会いそのものがそもそも唐突で飛躍的なものであることを思えば、これをそうした観点から批判するのは当らないであろう。

△13△注△3△参照・39頁

△14△同右

△15△寺田寅彦宛書簡（明43・3・4付）

△漱石全集』第十四巻（昭51・1・9）岩波書店 810頁▽

△16△△片岡良一（注△11△参照）130頁▽

この参禅がそれほど深刻な内面的探究の意欲の上にあるものとは感じられず、やはりわずかに心の平静をみだされたもの

の、その鎮静を望んだ程度のものでしてしか受取れない

△安東璋二(注△11)参照) 53頁▽

宗助の姿には、思いつきで門をたたいたものに対するこの世界のきびしさが語られていよう。△略▽参禅場面がその程度にしか描けなかったのは、宗助という人間の器量がその程度だったからとも言える。

△遠藤祐(注△3)参照) 94頁▽

要するに参禅は「希知」な自分をしっかりさせたいという△精神修養▽を目ざしたに過ぎない。禅に△精神修養▽を求めるのは、庶民的な禅理解として普通であって、そう考えればこの参禅行の設定は、いささかも不自然ではない。しかしこのような禅理解自体が「見当違」

△熊坂敦子『夏目漱石の研究』(昭48・3・5) 桜楓社・110

頁▽「参禅の失敗は、宗助の非日常性の拒否であり、日常性への回帰を意味する」

最近のものでは、

宗助が役所や妻にむかって、病気を装ったり、旅行を装ったり、現実との係わりを完全には離脱しないである

ためととらえている海老井氏の論がある。注△3)参照・51頁

△17) 『続夏目漱石』(昭18・11・10) 甲鳥書林・708～709頁

△18) 『漱石文学の支柱』(昭46・12・9) 審美社・63頁

△19) 注△2) 参照・179～180頁

△20) 注△17) 参照・710～711頁

△21) 同右・710頁

△22) 注△12) 参照・111頁

△23) 注△2) 参照・179頁

△24) 注△17) 参照・709頁

△25) 『虞美人草』豫告(明40・5・28『東京朝日新聞』) △『漱石全集』第十一卷(昭50・10・9 岩波書店) 497頁▽

△26) 「彼岸過迄に就て」(明45・1・此作を朝日新聞に公けにしたる時の緒言) △『漱石全集』第五卷(昭50・4・9 岩波書店) 7頁▽

△27) 注△12) 参照・177、188頁

△28) 『夏目漱石』(昭17・9・20) 甲鳥書林 176頁

△29) 注△11) 参照・127頁

△30) 同右・61頁

△31) 注△12) 参照・177～178頁

△32) 注△3) 参照・87頁

△33) 注△15) 参照

△34) 岡田耕三宛書簡(明43・3・2付) △注△15) 参照▽

△35) 鈴木三重吉宛書簡(明43・3・29付) △同右・822頁▽

△36) 皆川正禧宛書簡(明43・5・11付) △同右・822頁▽

△37) 橋口貢宛書簡(明43・5・22付) △同右・823頁▽

△38) 菅虎雄宛書簡(明43・6・10付) △同右・828頁▽

△39) 野上豊一郎宛書簡(明43・6・10付) △同右・829頁▽

△40) 安倍能勢宛書簡(明43・6・18付) △同右・834頁▽

〔41〕小宮豊隆『夏目漱石』（昭13・7・1）岩波書店660頁

〔42〕書簡を説明していくにあたって、小宮豊隆『夏目漱石』『漱石の芸術』から、示唆を得た。

〔43〕注〔2〕参照・182～183頁

〔44〕注〔11〕参照・43頁

安東氏はまた、「虞美人草」の題名のつけ方と共に、「門」という題名を弟子につけさせた事について、

それにしても健康が普通だったらそんなふざけた真似をしたかどうか。恰度その頃生まれた五女雛子の名前も、頼まれて草平がつけたというから、当時の漱石の気力の消耗も察せられる。

と述べている。

〔45〕「紹介状を貰ふ四五日前」を十日の次の日や、すぐではないとする理由をつけ加えると、十八章の冒頭が、「宗助は一封の紹介状を懐にして山門を入った」となっているからである。大みそかから十日の朝まで、ほぼ連続して、日付もはっきりしていたにもかかわらず、このような書き出しではじめているのは、十七章と十八章間の断絶操作を意識的に行っていると考えられるからである。

〔46〕注〔17〕参照・708頁

〔編集者追記〕

本誌の論考中の漢字は、印刷の都合上、本字体であるべきものの中に、新字体が混在してしまっている。特に、新字体と本字体が似ている漢字は、大部分新字体になってしまった。御諒承賜わりたい。